

|     |                 |    |   |
|-----|-----------------|----|---|
| 序章  | 悪魔△ディアボロ        | 2  | 〽 |
| 第一章 | 奏風 蒼一郎          | 6  | 〽 |
| 第二章 | 戦場。夜。森の奥にて      | 10 | 〽 |
| 第三章 | 聖竜騎士団△ドラゴンユニット  | 14 | 〽 |
| 第四章 | 対NR制圧兵器・05ヒュドラー | 23 | 〽 |
| 第五章 | 破滅の天使           | 30 | 〽 |
| 第六章 | 二人きりの逃避行        | 37 | 〽 |
| 終章  | 逃避行の結末          | 41 | 〽 |

## 序章 悪魔<sup>△</sup>ディアボロ<sup>▽</sup>

地面も空も、見渡す限りの灰色が続いていた。

大地は何処までも不毛で、血と火薬の臭いで満ちている。

エタニティ共和国と<sup>△</sup>国、二つの国の境目は完全に戦場と化していた。

暴力と破壊が支配する空間、そこを、死に物狂いで駆け抜ける影がある。

一つは少女だ。赤い髪を肩にかかるほどまで伸ばしている。呼吸を荒くしながら走る姿は許しを乞うているように見えた。

年齢は十を超えるかどうかといったところ。まだ子供だ。

戦場にて十歳そこらの少女が何者かに追い回されている、たったこれだけの情報を抜き出せば、その少女を哀れな被害者や戦争孤児ととらえたものもいるだろう。

しかし、悲痛な表情で何かから逃げ回る少女には留意すべき特徴がもう一つあった。

グレーの長そでシャツと、それと同系統のスカート。スカートとシャツの間には物々しいポーチ……。そして、首には物々しい輪と、銀色のタグ。

『2321』銀のタグにはそう記されていた。

四桁の数字、そして、戦場に現れた子供。これらの特徴を併せ持ったその少女を見て、まだ可哀想などという世迷言をはけるものがあるならば、そいつはきつとよほどのバカか博愛主義者だろう。

兎も角。

「絶対に逃がすなッ！ 確実にとらえろ！」

少女を追い掛け回す一つの集団、その中の一人が叫んだ。

全員が同じ黒を基調とした装備に身を包んだ兵士たち。

物々しい銃器を持って、一切の遠慮すらなく少女を追い回す。

「止まれ薄汚い化け物め！ 悪魔に魂を売った子供<sup>ガキもどき</sup>擬きの怪物がッ！」

叫ぶ声でした。

化け物。怪物。それすなわち、科学技術によって人智を超えた力を埋め込まれた子供たち。その名を『ネバーランド』。

エタニティ共和国が解き放った恐るべき破壊兵器たち。

「ッ……！ ハアッ！」

喉元まで出かかった何かを飲み込むように吐息をこぼしてから、兎も角、がむしやらに走って行く。

「このッ！」

パンッ！ という発砲音が響いた。

放たれた弾丸は少女の足をかすめるとそのまま地面に突き刺さる。

それと同時に鈍い音も響いた。

少女……否。その形を借りた化け物が地面に倒れ伏す。

「追い詰めたぞ怪物め……ッ！」

部隊の中から、一人の男が進み出た。軍から支給されたであろう使い古されたライフルを突き付けて、男は勇ましく叫ぶ。

まるで、鬼の首をこれから跳ね飛ばさんとする、英雄がごとき勇ましさ。

「はぁ……はぁ……う」

「この期に及んで人間のふりか？ ふざけるなよモンスター。人と同じ形をしているだけの害悪が……ッ！ 覚悟しろよ。これからキサマを、死ぬよりつらい目に合わせてやる」

『人間』が『化け物』にむかっていく。

人と同じ形をしていても、少女は人智を超えた『ネバーランド』なのだ。

正義が悪を打つという構図だった。

分かりやすい。戦争という複雑な現実の中にあってソレはまるで絵本の構図。

そこへ。

ズバンッツツツツツツツツ！ という音と共に、破壊の一手が振り下ろされた。

何が起こったか。

そんな簡単なことすら理解できずに、その場にいた誰もが固まっていた。

「……よお。邪魔しちまったか？」

声が響いた。

灰色の戦場、薄い土煙の向こう側。そこに、何者かがいる。

「な。なんだ貴様……ッ！」

少女に向けていたアサルトライフルをその人影に向けて構えなおす。

そこに来て、ようやく気が付く。銃が、その先端が、綺麗に切断されている。

「は、は……？」

まるで現実感のない光景に、男は間拔けな声を上げること以外のことは何もできなかった。

土煙の向こう側に起立するシルエットも相まって、まるで夢か幻でも見ているようだった。

何者かが佇んでいる。

それはいい、そこまではいい。

問題は何者かがその背中に背負うもの。

背中から何かが伸びている。

ソレは人の手のひらのようだった。ソレは既存の世界を侵略して、自分の世界に書き換える外来植物のツルのようであった。

そしてソレは……まるで悪魔の翼のようだった。

圧倒的存在感を背負って現実なんて言葉を踏みにじって、ソイツはそこに立っている。

「おいおい……。さっきまでの威勢はどうしたんだア？ 俺にも言ってみろよ」

怪物が土煙のなかから決定的な一歩を踏み出した。

そこにいたのは青い少女だった。

空のような髪を、おさげにして前に垂らしているまるで二本の尻尾のように。グレーの半袖シャツに同色のスカート。鋭い空色の瞳に光はなく、その下にはクマが出来ている。

そして、背中では黒い何かが翼の形を作ってうごめいている。

両手はポケットに突っ込んで、口元には微笑みすら浮かべている。死と暴虐の中にあつて、腰に巻いたポーチ以外は手ぶら、近所のコンビニまで買い物に行くともいった様子の気軽さ。

理不尽が支配する戦場という舞台に置いてそれが許される。

「う、うて！ 撃ち殺せツツツツツツツツツ！」

叫びと同時に発砲音が響き渡った。

それも、一発二発の次元ではない。

横殴りの雨とでも表現できる程の……それほどまでの破壊。暴力そのものといえるほどの銃撃。

しかし……。ツ。

「ご挨拶な連中だぜ。いきなり撃ち殺せ……たアどんな教育受けてるんだお前ら」

「ッ！？」

カラカラカラ……と、子気味のいい音が響いた。

弾丸が、地面に落ちる音だった。

黒い触手が巨大なドームを形成している。それらに、弾丸はすべて防がれた。

文字に起こしてみれば、これ以上ないくらいに簡単な話だった。

しかし、それを、その光景を、現実の景色として、受け入れられるか。否か……。

「まア逆に、話が早くて助かるぜ……」

直後、黒い触手に動きがあった、ゴムボールのような球体を形成していたそれが、まるで首を持ち上げる蛇のようなしぐさで分離していく。

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ……。無数に分かれた竜の首にも似たそれがまるで品定めのように動いた。

「ネバーランド……ッ！ 『悪魔』……！」

ディアボロ

「認識いただけているようで何よりだ。ンなわけだからド派手に死ね」

直後、卓上のゴミを纏めて捨てるかのようなしぐさで、黒い触手が解き放たれた。音すらなく、まるでおもちゃの兵隊みたいに、男たちが空を舞う……。

まさに悪魔の所業。人の命を、歯牙にもかけないその在り方。『悪魔』の通り名で認識されるに相応しい力。

暴力の化身。正真正銘の怪物。

そんな、そんな化け物を見て……。

赤毛の少女は、かすかに口を開く。

「天使さん……なのか？」

「そう見えるなら頭がどうかしてるぜ」

黒い翼が伸びていく。

「さっきも言ってたろ。悪魔だよ俺は」

青い髪の少女。に見える少年は、倒れたままの、赤毛の少女に手を伸ばす。

驚くほどにその白い手は、天使のものか、それとも、或いは……。

その怪物の姿は、時折『悪魔』に例えられる。

その怪物の姿は、時折『蒼い月』に例えられる。

その怪物の姿は、時折『死』そのものに例えられた。

数多の形容詞で語られる悪意と殺意の化身。そんなネバーランドを見て、赤毛の少女は一言……。

天使。と、そう例えた。

「て、いうか、お前、何で最前線にいんだ？ 見たところ戦闘能力は無いみたいだが？」

灰色の戦場、そのど真ん中と言っても過言ではない場所で、蒼一郎は気楽に尋ねる。

赤毛の少女は無言のまま蒼い満月のような瞳をのぞき込んでいる。

「何だ。口がきけねエ訳でも無いだらいうが」

「……」

「おい……？」

「これどうなってるんだ？」

第一声がそれだった。直後、一切の断りすら入れることなく、赤毛の少女は蒼一郎の背中、つまり触手が生えた部分へと手を伸ばした。

か細い背中と生々しい触手の付け根をまさぐるように指でなでる。

「ンッ！？ ぐっ！？ 何すんだ teme！」

「おおお……。すごいリアクション、でもこういう時、普通はかわいい声出すものだと思うぞ？ そんな雄丸出しの声じゃなくて」

軽く突き飛ばされた後も、少女は平然とそう言つてのける。

男たちに執拗に追い回されて相当動転しているのか、或いは根っから正常ではないか、そのどちらかだ。まあ、どちらにせよ。この少女を助けた事を後悔しながらも、触手を消した蒼一郎は鼻で笑いつつ少女を睨む。

「元氣そうで何よりだ。余裕あるなら名を名乗れクソガキ。temeを殺して戦死者のリストに刻む必要があるんだからよお……」

「そう怒るな。あ、先ずは助けてくれてありがとうな。アタシは赤波あかなみ音彩ねいろ。よろしくな」

「よろしくする必要はない、クソが、助けて損したぜ」

くだらないことに時間を割いてしまった。そう判断して蒼一郎は音彩に背を向けた。別に彼は暇人というわけではない。やるべきことはある。

一度消滅させた触手を再展開する。それはまさしく悪魔の翼。

「ああ！ 待って！ 待って！」

「あア！？」

飛翔の、その直前、細い腰に手をまわしてしがみつくものがあつた。確認するまでもなく赤毛の少女。

小柄な少女が、小柄な少年に抱き着いて……

ドガンッ！ という轟音が巻き起こった。車が急に止まれないのと同じ。

蒼一郎の体は何の遠慮もなく舞い上がる。

無論、蒼一郎に抱き着いたままの音彩の体も一緒に。

「う。わっ！ うわあああああ！！！」

「バカッ！ 辞めろ！ 辞めろお前！ 暴れるなッ！」

「すごい！ すごい！ 飛んでる！ 飛んでるぞッ！」

「飛んでるのは俺だッ！ ヅ！！ 落ちっ！」

直後、空中でもみくちやにされながら、二人はそのまま落下していく。空中から地面に向けて真っ逆さま。

触手によるクッションのおかげで両者ともに怪我をしなかったのは不幸中の幸いだった。

「デメエ……ガチで殺すぞ……」

「ハハハ！ ソレはお前が話聞いてくれないのが悪いんだろ？」

「お前じゃねェ」

「じゃあ名前おしえてくれよ」

「奏風 蒼一郎……」

「蒼一郎が話聞いてくれないのが悪いだろ？」

「さてはまともじゃねェな。完全に頭が狂ってるに見える」

「そういうなよ蒼一郎！」

「……。いいか赤波」

蒼一郎は立ち上がってから音彩を軽く突き飛ばす。

音彩は平然と、腰に腕を当てて無い胸を張る。

「音彩だ」

「そうか。いいか音彩。俺は子供のままごとに付き合うほど暇じゃないんだ。やるべき事が山ほどある」

「やるべき事？」

「クソつたれなお仕事だ。クソつたれのお国の為に働かなきゃいけないんだよ。わかるかなあ」

「蒼一郎は真面目で大変だなあ……」

「のんきなもんだ、それとも何も考えてないのか？」

どうせお前も、似たようなもんだろう？ と付け加えれば、音彩は真っ赤な瞳を不思議

そうに細めた。

「アタシは何もしないしできないぞ？」

「は？」

「あのな、本当はものすごく強いらしいんだ。アタシの能力。けどな、うまく発動できないんだって、命に危機に瀕したら使えるようになるかもって最前線に投入されたんだ」

「如何にもクソ野郎揃いの研究員サマが考えそうな事だな」

「結果殺されそうになったけどな！」

「さっきまで血相変えてたやつと同一人物とは思えないテンションだな、何だ？ 死ぬの怖くないタイプのイカレバカか？」

「何言ってるんだ？ 死ぬのは怖いに決まってるだろ」

あっけらかんと言ってるのける、もうわけが分からなかった。だがそれは、何も蒼一郎が馬鹿なせいではあるまい。

音彩は、理解できない、という蒼一郎の感情を読み取ったように笑って告げる。

「どの道長くないんだ。アタシ」

「……」

「ソレは、ほんとはやだけど、受け入れてる。でも、殺されるのは流石にヤダなあ。まだやり残したことあるし！」

「そうか、頑張ってくれ」

「聞きたいか！？」

「ソロソロ敵軍の殲滅に戻らねエとな、えっと通信機器は……」

「聞きたいよな！？」

「そんなに聞きたいなら仕方ないな！」

「そんなに話したくて仕方ないなら素直に話せバカ。数十秒程度なら間抜けなおまえにも時間を割いてやるよ」

遂に、しびれを切らして折れた。

蒼一郎が苛立ちを隠そうともせずそう言えば、音彩は実に馬鹿らしい表情で瞳をキラキラさせてその場でクルリと回った。

小柄で痩せ型、吹けば飛びそうな少女は、灰色の世界で笑う。

一瞬。

本当に一瞬ではあったが、その笑顔に、思わず目を奪われた。底抜けの明るさ、太陽のように笑う少女は歌うように告げる。

「故郷のお花畑に行きたいんだ」

心臓があまりに早く動きすぎて停止してしまったようだった。

サツと吹き抜ける風が、音彩の髪とスカートが揺れた。

「最後に、あの景色を見ておきたい……」

今にでも消えてしまいそうな声で、少女は告げる。

「故郷……の」

「ああ！　だから蒼一郎に協力してほしいんだ！　国の端っこの方だから少し遠いんだ！　いいだろ？　な！？」

「断る」

ぐいぐい来る。ほんの一瞬でも美しいと、そう思った過去の自分をぶっ飛ばしてやりたい衝動に駆られつつ、蒼一郎はわざとらしく息を吐きだした。

「そもそも論、上層部の連中がそんな勝手を許すわけがねェだろうが」

「んゝ。ダメか……。そっか……」

「理解したみたいだな。そんなわけだ。ケガしたくないならとつと後方に引つ込め」

「そっか。それは仕方ないな」

「あア」

「じゃあ一人で行ってくるよ！　じゃあな！」

「ああそれが良……は！？　おい待て！」

友達に向けて「また明日！」とでも告げるような気軽い様子で音彩は駆けるような足取りで歩いて行く。

「オイオイ……おいおいおい。冗談だろ？　冗談だよなア？」

「いたぞ！　ネバーランドだッ！」

「うわあ！」

「マジかよアイツ、マジでよお……！」

触手を束ねて、蕾のような形を作っていく。ギュバンッ！　という音が響いて地面をえぐりながら見えない弾丸が飛んで行く。

叫び声をあげる暇すらなく音彩に駆け寄った一団が吹っ飛ばされた。

「おーい！　ありがとなあ！」

「デケエ声出してんじゃねェよ！　クソ素人がッ！　死にてエのか馬鹿野郎ッ！」

音彩以上の大声だった。能天気な音彩に歩み寄って、蒼一郎は深々としたため息をついた。

「しゃあねェ。ブザマに死なれても目覚めが悪いんでな」

「いいのか！？　本当に！？」

「それ以上しゃべったら俺の気分が変わっちゃうかもな」

「蒼一郎！　お前いい奴だな！　蒼一郎！　蒼一郎！」

「意味なく名前を連呼するなめんどくせェ……」

この短い時間で何度目かわからない後悔の時間だ。

灰色の戦場を、赤い少女と青い少年が歩いて行く。

二人の、逃避行のような冒険が、始まった。

## 第二章 戦場。夜。森の奥にて。

不毛の荒野を何とか抜けた。

現在地は暗がりの森。明かりは音彩が掲げる簡易的なライトだけ。そのほかには不気味な植物と得体の知れない生命体の密集地。

「なあ、蒼一郎……。やっぱり空を飛ぶのは無理なのか？」

「何度も言わせるな。俺一人なら兎も角お前を抱えて空中攻撃を迎撃しながら目的地まで行くのは無理だ」

「んゝ。やっぱりだめか……」

「俺一人が目的地に行くんならそれでもいいんだけどな」

「それ意味ないだろ」

「よくわかってるじゃねエか。じゃあやることは一つだよな」

「口じゃなくって足を動かす……何度も聞いたぞ」

「理解は遅いが記憶力はいいらしいな」

下らない言葉の応酬。無意味なやり取りを何度も繰り返しながら二人は森の中を歩いて行く。

横並びではない。蒼一郎に若干遅れて音彩が付いていく形だ。

「なあ、蒼一郎……」

「次くだらねえ質問を繰り返したらお前の頭をぶっ飛ばしてやる」

繰り返しを封じこめてから視線を真上に向けた。魔女の手のようにすら見える枝木の隙間から、夜空が見えた。

「んー」

「しゃーねえな。今日はこころで野宿だ」

「おお！ キャンプってやつか！？」

「いつ何に、誰に襲われるかわからない体験型のアトラクション込みだ。楽しいなア」

「冗談じゃないぞ……」

「そう思うなら精々俺から離れるな」

口調のみは吐き捨てるようにそう言って、蒼一郎はその場から一步も動かずに簡易的なキャンプ地を形成していく。

触手を起用を利用して小枝を集めて、葉っぱで寝床を形作っていく。

「おお。器用だな蒼一郎」

「まだまだこんなもんじゃねえよ」

ニヤリ。と小さな笑みを口元にたたえてから、触手の先端で小枝の山に軽く触れた。そこから数秒間を置けば黒い煙が一筋漏れ出す。

ものの数秒後には小枝の山は焚き木に早変わりしていた。パチパチ……というはじけるような音が響いていく。

「凄い！ それどうやったんだ！？ 蒼一郎ってなんか色々能力持ってる系か！？」

「そういうんじゃないやねエ。摩擦だよ。摩擦。触手を形作る微生物をうまく動かして……」

「魔法みたいだな！ 凄い！」

「人の話聞けよ……」

「？ よくわかんないけど凄いつてことだろ！ じゃあ凄いでいいじゃないか！ 凄い凄いいー！」

鼻息荒くして興奮気味に全身で喜びを表現する。

どこか小動物じみたしぐさが、ふと、記憶の遠いところにあるものと繋がった。

『そうくんはすごいね。まるで魔法みたい！』

目を閉じて、首を横に振って、かすむ幻覚を振り払う。

「一人ではしゃぐな、良いから飯食って寝ろ。目的地までまだあるんだろ？」

「うん、あと今日歩いた距離とおんなじ分くらい」

「半分か、意外と来てるな」

「の倍くらいだな！」

「先は長そうだ」

適当な木に背中を預けて、ポーチから取り出したのは形態食料だった。殆ど味のしない角ばったエサを取り出して軽くかじる。

「うへえ……よくソレ無表情で食べられるな……」

「泥に比べればまア全然食えるぜ。後は吐き気を我慢すればそれで楽勝だ」

「それって楽勝っていうのか……？」

「良いから我慢して食えよ。栄養価は高いらしいぜ」

「んー。ん。やめとく。おなか減ってないし……」

「……まあ、それもいいんじゃないやねエの？ クソ研究者の監視の目もねェんだ……」

「蒼一郎って相当口悪いよな」

「黙れ。寝ろ」

「なあ！ 恋バナしないか？ 恋バナ！」

「お前滅茶苦茶だな。絶対ヤダ」

「ううん。仲良くなるためにはそれが一番だって聞いたんだけどなあ」

「知識に偏りがあるな……」

呆れる蒼一郎に対して、音彩はほほを膨らませて抗議する。

「なんだよう。じゃあ仲良くなるためには何すればいいっていうんだよ」

「……しいて言うなら。悪口大会とかか？」

「悲惨すぎるぞその仲の深め方！」

「研究者も軍の上層部も能なしのボケ集団だ。間抜けの無能が粹がったのさばるエタニテイは滅ぶべきだ」

「恨み節がすごい!?」

「あとそれからそもそも今戦ってるこの国も……」

「やめやめ! 止まなくなるパターンだろそれ!」

「夜通し語れる自信があるぜ」

「ノイローゼになりそうだぞ……」

「それが嫌ならもう寝ろよ。明日以降は早めに起きてテキパキ目的地を目指す」

「……うん」

「時間、ないんだろうが」

「……」

「音彩。一つ聞いておきたいことがあるんだが……」

「ん……」

「本当に目的の場所に行くだけでいいのか? 長くない、なんてのもどうせ研究者連中が勝手にそう言ってるだけだろ、別に、延命の方法なんていくらでもあるだろ」

「無いよ」

きつぱりと。断ち切るようにそう言い切った音彩は、弱弱しく微笑んだ。

「方法なんかないんだ……。でも、アタシは別に、それでもいいって思ってる」

「そうか。まあ、それもそうか。こんな世界だ。無理して生きる意味もねえよなア?」

「んや。それはちよつと違うぞ」

きつぱりと、穏やかな声が差し込まれる。音彩は目を細めてほほ笑むとゆっくりと告げた。

「蒼一郎は、この世界があんまり好きじゃないみたいだけどさ。アタシは思うんだ」

「何を?」

「この世界は、そんなに醜くない」

「っ」

目を見開いて、思わず息を飲み込んだ。

『世界はきつと。そんなに醜くなんか無いよ』

記憶の中で、もう年下になってしまった少女の言葉が蘇る。

「アタシはそう思う。先は長くないし、失敗作でしかないアタシだけど、それでもきつとって。そう信じてるんだ」

愚かだ。とは言えなかった。

狂っている。と吐き捨てることはできなかった。

かと言って、そうか。なんてうなずくこともできずに、蒼一郎は無言のまま膝を抱えなおした。

「その考え方を、忘れんなよ」

「……？ そのつもりだけど」

パチッ……。という音と共に焚き木がはじけた。

淡い赤色が夜空の黒を燃やしていく。

会話は、もう生まれなかった。夜が静かに更けていく。

炎の揺らめきを静かに眺めていた蒼一郎はいつの間にか眠りに落ちていた音彩の姿を見ていた。何処からどう見ても、普通の少女だ。蒼一郎の姉がそうだったように、少女もまたただの子供に過ぎないのであろう。

「くだらねえな」

何に對して……。か。それは蒼一郎自身にも分からなかった。そして、それからしばらくして空が明るくなり始めているのに気が付いた。

ゆっくりと夜があけていく。ほんの一睡すらすることなくその場に座り込んでいた蒼一郎は、暫く迷ってから立ち上がって焚き木を叩き潰した。

「夜明けだ。行くぞ」

森を抜けて、二人は山の中に入っていく。

赤い少女と、青い少年。夜があけて、新しい朝がやってくる。二人の旅は続いていく。

「ふああああ……」

「欠伸する余裕がるか。現実が見えてないか余程の大物か……」

赤毛の少女は眠たそうに眼をこすり、フラフラとした足取りで蒼一郎の後を付いてくる。

「んん……んんん……」

「頭回ってねェんならしゃべろうとすんな」

この寝起きの悪さとだらしなさでよくネバーランドとして施設でやってこれたものだ。

そんなことを考えながら蒼一郎は先陣を切って歩いて行く。そこで。

「待て」

「ん、へ？」

ドツとう感覚があつた、如何やらぼんやりお姫様こと音彩が背中にぶつかつたらしい。

もはやそこに一々突っ込みを入れる蒼一郎ではなかった。

「……いい加減に起きろよ音彩。気を付ける」

「……誰か、いるのか？」

「足跡が複数。統率の取れた足跡の感じは軍隊特有だな。敵が近い。どうする？ 見つかる前にぶちのめすか？」

「物騒な奴だ。なるべく戦いは避けたいぞ……」

「ネバーランドらしくねえな」

「人間らしいって言ってくれ」

「違いねェな」

蒼一郎は穏やかな声でそう言うと、音彩の小柄な体を抱き寄せる。

「わっ」

「一応戦いは避けるがここから先は何が起きるか解んねェ。今まで以上に俺から離れないことだな」

「う、うん……」

「う、うん……」

山道をそれていく。大きく迂回する形で山を越えるという計画だ。

「はなすなよ」

音彩を抱えながら、まるで空中を動くような動きで木々の隙間を移動していく。

木の幹に、或いは地面に触手を引っ掛けて飛翔する。

そのまま少し開けた場所に着地した蒼一郎は背の低い木に隠れるようにその場にしゃがみこんだ。

少し小高い場所だった。

眼下には少し開けた空間が広がっていて、そこには幾つかのテントが設置されていた。周りにバリケードが張られているところを見るに、山の中腹に基地を設置したのだろう。急ごしらえなのかあまり大した施設があるようには見えない。

基地を監視しているらしい軍服の男たちが銃を抱えて右往左往している。何やら忙しそうだ。

「殺しとくか？」

「さっきも言っただろ。スルーだ」

「わかってる。ちょおつと言ってみただけだ」

退屈しのぎのようなテンションで笑う蒼一郎の腹部に軽い一撃が叩き込まれた、うめきながらにその衝撃の正体を見破る……までもない。

この場に、そんなことをできるのは一人しかない。

にらみながらに見下ろせば、音彩が真剣そのものといった様子で蒼一郎の方を見上げていた。

赤い目に映った自分をのぞき込む形、それだけで蒼一郎は続きを促した。

細い指先が、眼下に広がる敵軍基地のある一方向に向けられる。

見ればバリケードの入り口から数人が入ってくるころだった。

黒い軍服に身を包み、大きな重火器をしっかりと握りこんだ二人の男、その間に挟まれる形で四人程度の子供が連行されているところだった。

年齢は最低十歳から最高で十六といったところか。

「ネバーランドだ」

「戦闘能力はないように見えるなブザマにも捕まってるところを見るに」

「だろうな、どうする？」

「助けに行こう」

「悪くない決断だ。気にいった」

そこから先は早かった。

音彩を抱えなおして蒼一郎が舞い降りる。

ズダンッッッ！！ という轟音とともに、青い少年……いや、蒼い悪魔が舞い降りる。

「ッ！ なッ！」

「屈んでろよ音彩」

直後、巨人が腕をでたらめに薙ぎ払うような暴力があった。

黒い触手が横一文字に振るわれて、バリケードとテントを吹き飛ばす。

「悪魔か……ッ！」

「俺も有名になったもんだ、サインいるか？」

「くたばれ！」

鋼鉄製のプレートにさえも風穴を開けるはずの弾丸がいとも簡単に叩き落される。

「誰が誰に向かって口きいてるんだ？」

虚ろな瞳の死神が哀れな人間を嘲笑う。

「ッ！！」

本当に、本当に片手間だった。黒い触手が二人の男を薙ぎ払い、ネバーランドたちを拘束から解き放っていく。

「逃げる雑魚ども、ここは俺が引き受けてやるよ」

「ふざけるなよ怪物め……ッ！」

「いくらでも吠えろよ人間。命乞いでもいいぜ？」

羽虫でも叩き潰すような力加減で、触手が唸り、振り下ろされた。

最初の二人の男たちも、遅れて加勢にやってきた軍団も、まるで敵にはならない。

食事に作られたフォークやスプーンで、巨大な戦車をつぶすことができるか？

答えは当然、否。

それほどまでの戦力差。

「グアッ！！！」

「ガハッ……！！！」

圧倒的な力の渦が、人数という戦力差を覆していく。

「化け物風情が……ッ調子に乗るなよ……ッ！」

負け犬の遠吠え。

体中を真っ赤に染めながら男が叫ぶ。

「まだ叫ぶ元気があるみたいだな。大したもんだ」

「……ッ！ 蒼一郎！ 上！」

音彩が叫んだ、その直後。

世界を丸ごと震わせるような音が聞こえてきた。はじかれる用に顔を上に向ければ灰色の空を黒い何かが横切っていくところだった。

三角形に近い形をした黒い戦闘機。翼を広げたドラゴンのようにすら見えるその物体は、一度、蒼一郎の頭上を通り過ぎてから大きく旋回してまがまがしくすら見える鋭い先端を突き付ける。

「ッ！！！」

ゾクッ……と。蒼一郎はここに来て始めて寒気を感じた。身の危険、恐怖、即ち死の気配。

ブワッ！ と風にあおられて花びらが舞うように、黒いチリが渦を巻きながら戦闘機を中心に捉える。

蒼一郎の触手。その本質は微生物。微細な生物が渦を巻き、狙うべき敵を正確に定める。そして次の瞬間。金属の塊が強引に貫かれるような音があつた。悪魔の指先が、戦闘機のと真ん中を正確に貫い……ッ

「ッ！ 伏せろッ！ 音彩ッ！！！」

叫びは、実際には声として出力されていなかったのだろう。

兎も角、全ては、光と音に飲み込まれた。

スタングレネード。あまりに強力な光と音が一瞬蒼一郎の正気を奪った。

非殺傷武器なんて生易しいものじゃない。

まるで拷問の末四肢を奪い、両目をつぶしておいて、それでいて命を奪ってはいないのだから人道的だとのたまうようなもの。

「ぐう……がつ……ッ！」

全てが、白と黒のシルエットに思えた。音彩はどうなったか、ネバーランドたちは逃げ切れたか、そんなことを認識する暇もなく悶える蒼一郎に横風の衝撃が加えられる。

「てんメエ……ッ！」

白と黒が、明確な色を取り戻していった、ようやく正確な景色を認識した。

自分は今蹴り飛ばされたのだ。

そこに立っていたのは二十代半ば程の女だった。

黒い髪を高等部の高い位置で束ねた活発そうな女性。

ノンフレーム眼鏡の奥では紫色の瞳がキラキラと輝いている。

競泳水着の上から白い黒いコートというバカげた格好も、モデルのような体系の女がやっていると妙に様になって見えた。

「おや。おやおやおや。立ち直りが予想よりも二十秒は早いね。ネバーランド故カナ？ それとも君が悪魔故カナ？」

女は、両手を広げて妙に芝居がかったしぐさで笑う。

「初めまして4944・ディアボロ。君のうわさはかねがね聞いているよ。女の子同士のデートを邪魔しちゃったみたいで悪いねえ」

「女の子扱いしてくれてんじゃねえ。殺されたいのかクソ」

「本当に復活が早いんだねえ」

女は、倒れたままの赤毛の少女を足蹴にして笑う。

「ああ分かった、もう言葉はいらねえな死ねッ！」

引き絞った弓から矢が放たれる用に、黒い触手が放たれる。

蒼一郎の背中から翼のように伸びていたものが一斉に、合計六本。たった一人の少女にそれらが向かうさまはまるでアイアンメイデンによる処刑だった。

そんな悪夢のような処刑は、果たされずに終了した。

「な！？」

それらすべてが、はじかれる。倒すべき敵に届かない。

コートの女は黒いコートの男たちを侍らせていく、己の左右に五人ずつ合計十人。信じがたいことに、彼らが触手をはじき返したらしい。

「結局は、人の能力つてところかなあ？ 対処できない訳がない」

男たちを代表する女が笑う。

圧倒的だった。

今までの敵とは格が違う。

「何だ。テメェら」

ニヤリ……。と女の口元が弓なりに歪む。

「対ネバーランド殲滅部隊 ドラゴンユニット 聖竜騎士団。私はそのリーダー。団長と皆からは呼ばれてい

るよ。以後よろしく」

一人の少女を足蹴にして、悪魔よりも悪魔な女は笑っている。

「よろしくしてやる道理はないなッ！」

ズババババババンッ！！ という連続で空気が爆発するような音が響いた。

黒い翼……。否。黒い触手が無数に分かれて伸びていく。六つや八つ。そんな次元ではない。二十、四十……。世界を埋め尽くすほどの黒が、蒼一郎の背中に広がっていく。

「無駄なあがきはしない方が賢明だぜい？ きゃわいいきゃわいこの子を傷つけないかったらねい」

団長は心の底から楽しいといった表情で音彩の体を持ち上げた。

あっさり持ち上がった少女の体はまるで盾。

「俺の触手ならお前らだけをブツ殺してやる事も出来るンだよなめんなッ！」

「じゃあどうぞ」

「ッ！」

数多の戦場すら一瞬で無に帰し、文明レベルで破壊を引き起こす、地形すら粘土をこねるように書き換えて、一人で一国の軍隊に匹敵するほどの戦闘能力。

その象徴が、一瞬でかき消された。

一瞬で掻き消えた。できない。

頭でわかっていても、ふるい切れない。絶対的な力を。

「鎮圧しろ」

冷徹な声突き刺さると同時に、蒼一郎の首筋に何かが刺さった。

バズバズバズ！ という子気味良くすらある音が響き渡って蒼一郎は悶えながらその

場に膝をつく。

全身が硬直するような感覚があった。

筋肉を無理やり縛られるような威圧感が体から自由を奪っていく。

「ぐう……ッ！ あア……ッ！」

「ふうん。持って帰るのはこっちでいいや。君たち。そちらの悪魔は好きにしたまえよ。

顔だけはいいんだ。自由に使うといい」

女はそんな風に吐き捨てるとお氣に入りのおもちゃを振りかざすように音彩を持ち上げた。

離れていく。

『。――』

離れていく……。

同じだ。これでは全く、おんなじだ。

直後、うつすらと目を開けた音彩と目が合った。

そして。

大丈夫だから……。

そんな風に、音彩の口が動いたのが見えた。

「ざけんじゃねエ……ッ！」

真っ黒な翼が、聖竜騎士団のうちの三人を吹き飛ばした。

「ッ」

「こいつまだ……!!」

「グルオオオオオッ！」

獣のような咆哮を喉奥から漏らして、首に突き刺さった物を引き抜いた。

もはや痛みはなかった。それよりも強い激情がその体を突き動かす。

「コードD！ 陣形をとッ！」

最後まで言わせない。構えた重火器ごと、男の体を貫いていく。

「こ、この……!!」

混乱が広がっていく、陣形が崩れていく。五人、四人、三人、二人、そして最後の一人。

「ひ、ひっ！」

「……」

「うがわぁっ!？」

触手が男の足をつかみ取ってからめとった。

音彩たちはもういなくなっていた。

能力者をせん滅するための部隊、そこに所属する男を咎人のように吊り下げながら蒼一郎はとう。

「あのゴミはどこ行きあがった!? 今すぐ吐き出すか、苦しんで吐き出した後死ぬか選べ! コラ……ッ!」

断章　ねいろはしっぱいさく

きつと、世界はそんなに醜くないって。心の底からそう信じていた。何か特別なきっかけがあったんだとか、誰かにそんな風に諭されたんだとか、そういうわけではない。

ただ何となく、そうだといいなって思ってた。

戦争なんて大きな次元じゃなくなたって、争いはなくならないし。

今日もどこかで誰かが死ぬし。

悪意の連鎖は止まらないけど……。

楽しい気持ちもつながるし。

今日もどこかで誰かが生まれる。

きつと、いつまでも戦ってばかりじゃないって。武器を握るその手で、花束を差し出すこともできるんだって。

そう思っていた。

何となく。

「音彩ちゃんには素晴らしい才能があります。是非とも研究所にご招待したい」

『大人』の姿はもうおぼろげだった。

研究者がどんな顔をしていたのか、父と母がどんな顔をしていたのか。もう覚えていなかった。

けれど、自分がどんな顔をしていたのかは覚えている。

希望に満ち溢れたような、そんな顔。

「さあ、僕と一緒に行こう。君には世界を平和にする力がある」

「うん。これは失敗作だねえ。アハハ」

笑い声が降ってきた。

研究者の男が、どんな顔をしているのかは酷くあいまいだ。でもきつと、呆れたように笑っていたのだろう。

世界の善生を信じる少女は、血の海に横たわったまま息を吐く。

「うーん。理論上は行けるはずだったんだが……。ふーん、何かが足りない？」

夏休みの宿題に苦戦でもしいられているような軽い口ぶりで男は手に持った記録媒体に何かのチェックをつけていく。

「ストレス……。或いは命の危機？ いや、いいやもしくは……」

少女は、赤く染まりかけた視界の中でふと、とある存在に気が付いた。

自分とは別の場所で実験を受ける少年少女たち。

ガラスで区切られた部屋の向こう、いとも簡単に、不可能を可能で上書きしていくネバーランドたち……。

「ああ……ッ」

自分はあるふうにはれなかった。

失敗作。欠落品。

自分は何物にもなれなかった。

「ああ……」

かすかな声が漏れ出てくる。

少女は、小さく絞り出す。

「いいなあ……」

灰色の天と大地。

その狭間を、蒼い悪魔が飛んで行く。音が遅れて響く、風圧が雲の表面を揺らした。奏風 蒼一郎。黒い翼を携えた怪物がある軍の拠点を目指して飛んでいく。

正直。これは完全に命令を無視しての行動だった。

国境の向こう側にある砦。祖声への襲撃は完全に違反だった。バレれば即、殺されてもおかしくはない。

しかし。

そんなものは、もう関係なかった。

「ッ！」

さらに加速してそびえる山々を越えていく。

目指すは、難攻不落の主要塞。

円形の壁に阻まれた巨大な城は数百年上も昔からその国の防衛のかなめである。なんて神話じみた逸話も残っている。

難攻不落、絶対不可侵の領域に、黒いすい星が落ちていく。

ドガンッ！ ドガンッ！ という轟音が立て続けに響いた。

隕石にも似た砲弾が、真正面からすい星を迎え撃つ。

爆音が、少し遅れてから遠くで轟く。

空中で灰色の空を真っ赤な光が照らしていく……。

その下に、一つの影が舞い降りた。

「ッ！」

「ブッ潰れる……！」

無敵の砦の中央で、黒い翼が猛威を振るう、武器庫も、食糧庫も、医療室も、最新の兵器も、何もかもを、男は蹂躪する。

「音彩を返せ」

「いの……ッ！」

瓦礫の向こう側から男が銃を構えた。そこに。

「まあまあ、せっかくのお客様をそんな風に雑にあしらうのはやめたまえよ」

そこに、女教師のように落ち着いた声が差し込まれる。

競泳水着にコートのカラた女。団長

団長は手の動きだけで兵士たちを下がらせるとわざとらしく両手を広げた。

「やあやあ、よく来てくれたね化け物ちゃん。歓迎するよ」

「音彩はどこだ？」

「つれないなあ。雑談に付き合うつもりはないのかな？」

「そうか。答えるつもりがないなら死ね」

黒い触手が唸る。それより先に、動きがあった。何かが、蒼一郎の体を横から殴りつけて吹き飛ばした。

「グッ!？」

口の中いっぱいに血の味が広がって、景色がぐるぐると回転した。

内臓の全部をまるまるシェイクされながら、蒼一郎は黒い触手を使って空中で見えないものをつかむように静止した。

蒼い瞳が、その何かの正体を正確に捉える。

信じられないものを見た。

その何かは、長くのびる機械。ロボットアームとでもいうべき物体だった。

全体的な色は銀色で、その先端にはモーニングスターのような、凶悪なふくらみが見える。

「紹介しよう」

団長が楽しそうな顔で笑いながら指を鳴らした。

ボコッ! という擬音が響きそうなほど現実感のない光景。それと同時に地面が隆起する。

地面から、何かが飛び出す。

角張った灰色の本体から、無数のロボットアームが生えている、その姿は、まるでいぞぎんちゃく。

その先端は、凶悪なドリル、その先端は、鉄をも溶かす高温を放つ火炎放射器、その先端は、コンクリートすら簡単に握りつぶすペンチ、その先端は、青白い電気をまとった巨大なスタンガン、その先端は、人の掌を模したであろう巨大な金属、その先端は、禍々しい色をしたナイフのような合金。

無数の腕の先に、無数の凶悪な武器を携えた破壊の兵器。

「対NR制圧兵器」

そして、角張った本体の中央に、鳥かごのような小さい檻があった。

その中で眠るのは、赤毛の少女。囚われの乙女。

「音彩……」

「ヒュドラー。私はこいつをそう名付けた」

ヒュドラー。神話に登場する多頭の蛇と同じ名前を与えられた兵器。

「大した名前だな。それよりもっといい名前をくれてやる」

「聞こう」

「スクラップなんてのはどうだ!？」

翼を広げたまま、右腕を突き出した。腕からびだした触手たちが花のつぼみのような姿を形作る。

右腕が、まるまる蕾に置き換わったような形。

そして、同時に、動きがあつた。ヒュドラーの構える無数のロボットアームがうなり声を上げながら蒼一郎に襲い掛かる。

「チッ!」

蒼一郎は右腕を地面に向けると空気の塊を解き放った。真上に飛び上がりながら多頭の蛇の暴虐から逃れていく。

一度空中に飛び上がり、大きく旋回する。自由自在に空を舞うその姿は大型の猛禽類のようだった。

急上昇からの急降下。蒼一郎はヒュドラーの胴体めがけて落ちていく。

音彩のいる本体ごと貫く勢い。その直後。蕾を形作っていた触手が大きく『花開いた』スパン! という子気味のいい音と共に無数の頭が切断されて落ちていく。怪物を怪物たらしめる無数の頭が切断されていく。

無論、本体に傷は無い。音彩は全くの無傷だ。

圧倒的。これがネバーランド。

「多頭の蛇を自称するにはちつとばかり頭が足りないみたいだな。コイツも、お前も」

圧勝だった、にも拘わらず、団長は薄気味悪く笑っている。

「本当にそう思うカナ？」

直後。ヒュドラーから伸びたロボットアームが蒼一郎の体を縛り上げた。

「ッ!？」

呼吸が止まる。腕と触手の動作をまるまる封印されながら蒼一郎は口から赤い液体をこぼした。

「これがヒュドラーだよ」

丸裸にされたはずの胴体から、無数の腕……。いいや、頭が起立していく。その先端に、それぞれ凶悪な武器を宿らせた悪夢の兵器が復活していく。

「クソが……!」

まるでからめとるように、自分の体を縛り上げるロボットアームを無理やり引きちぎって蛇の射程範囲から離脱していく……。

真上からみたヒュドラーの胴体にロボットアームが密集している。

それらアームの先端に、悪夢のような破壊兵器を携えて、ヒュドラーが笑っているように見えた。

「コイツの腕はナノマシンで構成されている。理論はずっとあったんだが、如何せん動力源がなくなつてねえ」

団長はまるで子供が新しいおもちゃを自慢するかのようなテンションでヒュドラーの力を、その根幹を語っていく。

「ネバーランドの能力をそのままマシンの動力に転用させてもらった。もえるだろう？」

「バカみてえ」

「そんな兵器に、これから君は殺される」

ガトリングガン、火炎放射器、モーニングスター、万力、ペンチ、ブレード、ドリル、ハンマー。

無数の腕が、蒼一郎の体を明確にとらえる。

「死ぬのはお前だ」

ヒュドラーと黒い触手、あまたの力を携えた無数の力が衝突する。

弾き、はじかれ、切断し、切り落とされて、激突して互いが互いを削り取っていく。

「力は互角。先ずはそれで結構。ではこれでどうかな？」

団長がポケットから取り出したリモコンを操作した。

「ジ……ザザ……ッ」

ノイズのような音がヒュドラーから漏れ出した。ロボットアームの動きが激しさを増していく。

「ッの……！」

モーニングスターのような武器に体を殴られながら、蒼一郎は要塞の壁にたたきつけられた。数百年もの間難攻不落を保っていた要塞の壁が崩れた。

全身を巨人の手で握りつぶされるような凄まじい激痛。視界が白と黒の二色に埋め尽くされる。

「音彩ッ！ 起きろッ！ 殺すつもりかア！？」

叫ぶと同時に、内蔵が握りつぶされるような錯覚に襲われた。

「無駄だよん。お嬢ちゃんの意識はもうない」

ガコン……ッ。という音を立てて、ヒュドラーの本体がうごいた。

明確に獲物を正面に見据えて舌なめずりを繰り返す獣のように。

「……」

「アッハハ！ どうだい？ 音彩ちゃんごと貫けば止められるかもねエ？ ね？ どうだい？」

「ふざけんなよクソがつ！」

ヒュドラーの首が唸る。それらすべてを真正面から受け止める。

四方八方で爆発が起こった。触手とロボットアームがぶつかって破壊をあたりにもたらしていく。

「そもそも君さ、何の為にここまで来たんだい？」

「あア？」

「意味ないだろう？ どうせ君たちの変わりなんていくらでもいるんだ、たった一人を電池としてもらっても問題ないはずだ」

団長は続ける。

「国のため。というわけでもないよねえ？ 実に疑問だ」

暇つぶしにテレビのチャンネルを回すような手軽さだった。

団長が軽くりモコンを操作すると、ヒュドラーがさらに暴れ狂う。

「お前にはわからねえだろうが……ッ！」

波のように押し寄せるロボットアームの波をかき分けて、機械の胴体に張り付いた。

「音彩！ 起きろ……ッ！」

鳥かごのような、棺桶のような入れ物を叩きながら蒼一郎は叫ぶ。

「……ッ。……」

「だあかあ……！ 無駄だよ。その子の意識はもう既にこちら側で完全に制御下に置いている」

「だから……ッ！ 何だって言うんだ！」

ガラスのような素材で覆われた鳥かごを叩きながら、蒼一郎が叫ぶ。

そう、だから何だっていうんだ。

「そ……いち……ッ」

「手を伸ばせ！ 早く……ッ！」

「はあ……。殺せヒュドラー」

音彩を覆い隠す、鳥かごのような入れ物にひびが入った。その直後だった。ヒュドラーの胴体が凄まじい勢いで振動して蒼一郎の体を吹き飛ばす。

「グ……ッ！」

口の端から真っ赤な液体を吐き出しながら、蒼一郎は着地する。

「諦めなよ。どうせ意味なんかない」

「……テメエが、決めたくだらない価値観で、俺たちを縛るな」

瓦礫の中に堕ちながら、蒼一郎はそれでも立ち上がる。

「……」

「俺も、音彩も、お前らごときに縛られる程弱くない……。なめんなよ。くだらねエ」

「じゃあ、どうする？」

「踏みつぶしてやる」

「不可能な理想は愚かにすら見えるな」

「ほざいてろ……」

そう言つて。

蒼一郎は、グレーのシャツを脱ぎ捨てた。

細い上半身をさらしながら、蒼一郎は、ニヤリと笑う。

虚ろな瞳に荒ぶる蒼い炎をたたえながら、蒼一郎は、触手を大きく広げていく。

その先端が凶悪な鎌に変化した。その先端に蒼い火炎が宿った。その先端に雷電がほとばしった。その先端が恐ろしい爪に変化した。

「せっかくだ。ままごとに付き合つてやるよ」

「是非お相手願おうか？」

その瞬間、一切の音が消えた。

要塞の中央で、悪魔と竜が激突する。

堕ちた天使の行く先である悪魔と、邪悪な侵略者のメタファーであるとされている竜。即ち、悪と悪の衝突。

多頭の蛇のようなロボットアームと、翼のような黒い触手が激突する。

「力はこっちの方が上だ」

「ソレはどうだろうなア？」

瞬間。ヒュドラーの体が大きくのけぞった。

地面から飛び出した触手がヒュドラーの本体をすつ飛ばした。

「ッ！？」

無論、そこを逃す蒼一郎ではない。ズドドドッ！ という凄まじい轟音の波と共にヒュドラーを叩き壊していく。

「ヒュドラーは凄まじい兵器だよ、そりゃあ認めてやる。けどな」

「ヒュドラーッ！！！」

「所詮はネバーランドの真似事だろうが。炎にドリルに、ペンチに、マシンガン、その程度の力なら、俺でも再現できる」

ひねりつぶすべきはロボットアームではない。

巨大な胴体。そこに、連撃が叩き込まれていく。

「馬鹿な！？ 電池の女を殺すつもりか！？」

「その時点で、お前は一步俺の次元から外にいる」

金属を、無理やり引きちぎったような異音が合った。ヒュドラーの胴体に穴が開いて、音彩の体が露出する。

「せ、制御が……！」

ズッバチン！ という静電気が始める音を数千倍に膨らませたような音だった。

その直後に何が起きるのか。子供にだって想像がつくはずだ。

全てを飲み込む大爆発。ヒュドラーのすぐそばにいた団長も、そのど真ん中に寝そべつ

ていた音彩も、すべてを飲み込んで、機会が無残に四散する。  
辺りが火の海に包まれる。

燃え盛る火炎の中に降り始めた雨が落ちていく。

「ふうっ……く。ば、ばかが……!! それじゃあ結局誰も、救えなッ」

「誰が誰を救えないって？」

まるで、あざけるような声だった。

血まみれの大悪魔が、爆炎の向こう側から姿を現す。

凄まじい紅蓮の炎すらかき消して、涼しげに笑う。少年の腕の中には、小柄な少女が抱かれていた。

「ッ!!!」

「自分の思った通りにならなくて残念だったな。でもな。ここがお前の限界だ」

「クッ……!!」

直後、黒い悪夢が振り下ろされた。

まるで羽虫を振り払うような気軽なしぐさで、団長の頭を薙ぎ払う。

「終わったぞ、起きろ音彩」

その時……。

蒼一郎の腕の中で明確な動きがあった。

「ッ!??」

ドガンッ!!! という轟音が、蒼一郎の体にたたきつけられた。

暫く地面を転がって、蒼一郎は、その姿を見た。

音彩の体が、空に浮かび上がっていく。

力なくうなだれて、何者かに持ち上げられるかのように。そして……。

「……。う……。あ」

力なく口を開く。

少女の背中には、光そのもので構成された翼が顕現していた。

## 第五章 破滅の天使

凄まじい光の波が巻き起こった。

世界を何もかも塗りつぶすほどの光の渦。その中心に少女がいた。凄まじい光が、翼のような形を作っていた。

天使。

そんな言葉が思い浮かんだ。

「何かと思えば。俺の真似か？　おい」  
『……』

音彩。或いはそうだった者。それは静かに顔を上げた。

真っ赤な髪が舞い上がり、瞳に凄まじい光が宿っているのが見えた。

『……』  
初めに動いたのは光の天使だった。

ズオアッ！　という空気が燃え上がるような轟音とともに光の翼が大きく広がっていく。その直後。太陽が落っこちてきたと錯覚するほどの衝撃があった。

翼が放射状に広がって周囲にあるものを破壊、いいや蒸発させていく。

「ッ！」

蒼一郎の触手が、光の束と接触した。

神業とっていい程のスピードで光線を防いでいく。それでもなお、全身を叩き潰されるかのような衝撃だった。

手足を縛られたまま激流の中に放り込まれたように、触手に包まれた蒼一郎の体は滅茶苦茶にされて吹き飛ばされていく。

『……』  
「ゴハッ！！？」

口の奥が鉄の味で染まる。サッカーボールのように地面を転がりながら蒼一郎は確かに、静かな声を聴いた。

『もう。ほっといてくれ』

『いやだ』

『蒼一郎を、傷つけない』

言葉、というよりかは思念の洪水だった。脳の奥に直接流し込まれた声を聴いて、蒼一郎は立ち上がる。

周囲の壁はドロドロに溶けて崩れていた、まるでそれ自体がおかしでできた作り物のようである感まるでない。

まるで崩壊後の世界だった。

破滅の光が世界を焼き払って浄化がなされたその後の世界。

破滅の天使。そうとでも呼ぶべき音彩はもう一度ゆつくりと翼を広げていく。

『アタシは。失敗作だから』

思念と共に地面が隆起した。蒼一郎を囲むように地面が起立する。例えるとすれば巨大な槍。処刑器具アイアンメイデン。殺意と敵意を固めたような連撃が蒼一郎に向けて牙をむく。

「……」

触手で地面を思いつきりたたきつけて真上に回避する。地面の槍を叩き壊して着地しながら、蒼一郎は、自分の胸の内側に凄まじい感情が湧き上がってくるのを感じていた。

煮えたぎるマグマのような感情だった。

「ふざけるな」

まるで、吐き捨てるように、蒼一郎は破滅の天使に告げる。

「ふざけてんじゃねエぞ！ 赤波音彩ッ！」

『……』

一瞬。光の翼にノイズが走る。蒼一郎は、口から血の塊を吐き出して、傷ついた自分の体に鞭を打つ。

全身を細かい刃で切り裂かれるような激痛も無視して、蒼一郎は、やるべきことを見据える。

「失敗作？ クソの研究者どもが勝手につけたようなくだらない価値で、自分を縛り付けてんじゃねエ！」

『……』

音彩は何も言わない。天使の形を作った少女の姿はまるで光の海におぼれているように見えた。

「黙ったままかよ。あア結構だ。音彩、覚悟しろよ。俺が今から否定してやる」

蒼一郎は、音彩に向けて宣言する。

「お前が自分を縛るその価値観も、お前が自分をその程度にとどめてる世界も、俺が今から否定してやる！」

『……あ』

声というにはあまりにも小さな音が漏れた。束ねられた光によって形成された大天使の力が大きく広がっていく。

二枚、四枚、六枚、十二枚。

幾重もの翼を広げるその姿はもはや太陽のようにすら見えた。

赤い太陽の天使、相対するのは蒼い月の悪魔。

次の瞬間悪魔がロケットのようなスピードで飛翔した。

翼の形が変化して悪魔の腕のような姿を形作っていく。

『……』

天使が動いた。光で形作られた翼の中に細い鞭のような、或いは『触手』のようなシルエットを浮かび上がらせていく。

金属の板を無理やり引きちぎっていくような異音が響き渡った。

悪魔の腕と天使の翼が激突していく。反発する磁石を無理やり近づかせていくような緊張感、直後、ついにそれがはじけ飛んだ。

激突そのものではない、その余波に弾き飛ばされながら蒼一郎は悪魔の腕を振り上げた。山程度なら一撃で粉碎できる拳を光の中に、少女に向かって容赦なく振り下ろしていく。鈍い衝撃があった。

小さなものを叩き潰すような。というよりは、グローブ越しに壁を殴ってしまったような、そんな感覚。

悪魔の両腕は、天使の体どころか光の翼にすら届かない。

その直前でまるで透明な球体に阻まれているかのように腕が完全に静止している。

「なかなかやるじゃねエか。結構強い能力持つてるじゃねエかよ」

『離れてくれ』

「偉そうに……ッ！」

見えざる一撃が蒼一郎を真上から叩き潰す。地面にめり込みながらも、蒼一郎はもう一度。いいや、何度だって立ち上がる。

「見えてきたぜ。お前の能力。サイコキネシス物体操作ってところか」

天使は、光の海の中で揺蕩っているようだった。

物体操作。ありとあらゆるものを手で触れずに操作する能力。音彩のそれはより強力だ。

『光』ですら自らの制御下に置く力はまさに神の御業。

軍隊や国、いいや、それどころか世界のすべてすら敵に回せるかもしれない少女を前にして蒼一郎はためらわずに前に進む。

『……きず……ッつけたく、ない』

「……」

そこにいたのは、世界すら滅ぼすことのできる大天使なんかじゃなかった。

たった一人の少女。

弱くて、もろくて、誰よりも優しいそんな少女が、能力を暴走させながらも傷つけたく



光と影が衝突して凶悪なまでの爆発をまき散らしていく。

いつその事美しくすらある衝突が一体どれだけ続いたのだろう。数十分か。或いは数秒か。

永遠にも思えるほど短い時間の結末。

『そう……い』

まるで、リボンがほどけていくように、光と闇がはじけ飛んでいく。互いに完全無防備状態の時間が生まれる。

「ッ……！」

勢い良く地面を蹴飛ばして、初めにかけてしたのは総一郎だ。

血塗れとは思えないほどのスピードで音彩に向かって駆け出していく。

再び黒い触手が顕現していく、それと同時に光の翼が復活した。その間僅か十分の一秒。

黒と、

光が、

激突す……

『……！』

空っぽだった音色の瞳に感情が宿った。

驚愕。

一瞬。その目に映ったものが信じられなかった。

蒼一郎が、光の束に飛び込んでいく。

その姿は

その姿は――

悪魔なんかじゃなかった。

そこにいたのは、たった一人の、何の力もない少年。

悪魔を捨てた生身の少年が光の中に飛び込んでいく。

「音彩オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！」

直後世界が崩れるほどの轟音が響き渡った。

もう、自分がどこにいるかもわからなかった。

自分の内側で、何かがはじけるような感覚があつて、そこから先の記憶はあいまいだ。ただ、夢を見ていた気がする。

真っ暗闇の夢。

自分は失敗作で、誰かの役に立つこともできなくて、世界を照らすこともできなくて、そんな自分が、いやでいやで仕方がなかった。

そんな自分の嫌なところを、ずっと見せられていた。

自分は失敗作で、欠落品で。そんな価値が自分のすべてだった。

そんなすべてが、自分の世界だった。

そんな世界を、叩き割っていくだれかがいた……。

「……ッ！」

微かに、ほんの微かに声が聞こえた気がした。

暗い世界の、分厚い壁の向こう側……。

赤波音彩は、その向こう側に、手を伸ばして……

## 第六章 二人きりの逃避行

「……蒼一郎」

まるで、確認のような声だった。ともすれば、聞き逃してしまいそうなほど、小さな声。「なんだよ」

答える声もまた、小さかった。

本当に静かな時間、その中で、音彩は静かに問いかける。

「アタシ……酷いこと、いっぱい……」

「バーカ、俺を舐めるな。お前に氣遣ってもらうほど弱くねえんだよ俺は」  
「……」

「ちよつとハードだったけど。お前に教えてやりたいこともあったしな」

「え……？」

蒼一郎は、音彩の頭を緩やかに撫でながら、そつと告げる。緩やかな声で教えてやる。

「この世界は、そんなに醜くない。お前ひとりが何かを抱えて、一人でうずくまる必要なんてないんだよ」

「っ……」

「だから……。まああれだ」

音彩の頭をなで、もう片方の手で、その手を握ったまま、蒼一郎は続けた。

「これからも、俺の手を握ってろ」

「……」

赤い瞳が光った気がした。震える音彩は何度もうなずいて、蒼一郎の血まみれの体に自らの体を寄せていく。

「まあ少しヘビーだったがな。これからはあんな無茶苦茶をする前に、その、まあ何とかしてほしいもんだ」

「何とかって？」

「あ？ さつき言っただけだからだろうが」

「ん、ちよつと聞き逃しちゃったな」

「こ、このガキ……」

ニコニコと笑う音彩の姿は、蒼一郎をからかうのが楽しくてたまらないとも言いきなほどの表情だった。

一瞬ぶつ飛ばしてやろうか、だ、なんて考えて蒼一郎は握った手を振りほどいて立ち上がる。

「もう一回しか言わないからよく聞けよ」

そして、蒼一郎は音彩に向かって手を差し出した。

「この世界は、どうやらそんなに醜くないらしい。お前には俺がいるし。俺には……そのお前がいる。だから、これからは、俺の手を、お前に握っていてほしい。お前の手は俺が握るから……」

耳の先まで真っ赤になっていくのを自覚して一瞬だけ、自分で差し出した手を引っ込めてしまうところだった。

それを。

音彩は静かに握りこんだ。

「アタシは。もう長く……」

「一緒に、方法を探そう」

「……研究者たちは」

「奴らには頼らない。なんだっていい。世界ってのは広いらしい、きっと、なんとかできる方法もあるだろう」

「……そ、それって」

「俺と一緒に逃げよう何処までも」

手を握り合って、二人は、互いの温度を確かめていく。互いの鼓動を確認しあっていく。

「蒼一郎……」

「早く行こうぜ。こんなに派手にやったんだ。いつクソつたれの研究者どもが来るかもわからん」

音彩の手を強引に引いて、蒼一郎は歩いて行く。二人きりの逃避行。

あてもなく、行くべき場所もわからない。

でもきつと、大丈夫……二人なら……。

その時だった。

「あ」

まるで、おもちゃの電池が切れるようなあっけない音だった。つないだその手が離れていく。

音彩の体が倒れていく。

一瞬、何が起きたか分からなかった。まるで現実感のない光景に一瞬理解が追い付かなかった。

「音彩ッッッ！」

倒れこむ音彩を支えることすらできなかった。

土埃で汚れた後の音彩を抱きしめて力なく垂れさがってしまった手を握る。

「……。あ」

「な、何で……!!? なんでッ！」

叫びにこたえる者はいない。ただ、抱きしめた音彩の体は恐ろしい程に熱かった。わかってしまう。気が付いてしまう。理解してしまう。

音彩は……。

音彩はもう……。

「……。そう、いちろう……。」

「ッ！ おい！ しっかりしろ……！ まってろ、今助けてやるッ、病院、いや違う、研究所に……ッいやダメだ、それが一番だめだ……ッ。他に、ほかに何か……ッ！」

「いい」

きっぱりと、そう遮る声があった。

他の、ほかのだれのものでもなく、それは音彩の声だった。

「いいって……ッ！」

「アタシは、多分もうダメなんだ」

「ふ、ふざけんな！」

「……」

音彩は静かに首を横に振る。そして静かに蒼一郎のほほを撫でた。

「アタシは。最後にいっぱいもらったから……」

「ダメだ……」

「ごめんな、蒼一郎……」

「待ってくれ、ダメだ。嫌だ……ッお前が、お前がいないと……ッ。おねがいだから、前までぼくの前からいなくならないでくれ……ッ！ ぼくを一人にしないで……」

「蒼一郎……。二つお願いがあるんだ」

「なんでも……」

「花畑を見に行きたい。故郷にある、ものすごくきれいな花畑……。お母さんとお父さんと一緒に行った、あの場所に、もう一度行きたい」

「ああ、そんなもん、いくらでも連れてってやるッ。だから……」

「もう一つ……、アタシ以外の人に、手を伸ばしてあげて、欲しいんだ」

「……」

「蒼一郎はきっと強いから……、困ってる人がいたら助けてあげられるって思うんだ。そ

うやって、人とながって行って、いつかきっと、みんなと、支えあって行って欲しい」  
「……」

蒼一郎は少女の体を抱き上げた。

吹き抜ける風は、妙に冷たいのに、雲の隙間から差し込んでくる光は何故か温かく感じた。

音彩を抱きしめて、少年は、悪魔のような翼を携えて飛んでいく。

目的地は、少女の故郷の花畑。

終章 逃避行の結末

飛び立った悪魔は、とある村のはずれにある森の中に降り立った。  
その腕の中には赤毛の少女か抱えられていて、蒼い髪の悪魔は静かにはるか先を見据えていた。

「……」

「まってるよ、もう少しだからな」

足取りは重たかった。それでも進むうちに蒼一郎は森を抜ける。  
ふわり……。というやわらかい風が蒼一郎の体を撫でた。

「っ……」

「は、はは……。どうだ？　きれいだろ……？」

「……」

「ごめん、実はもうほとんど見えてないんだ……。なあどうだ？　どう見える」

「本当に。本当にきれいだ……」

音彩を抱き寄せて、蒼一郎は何度もうなずいた。緩やかな風が蒼一郎の三つ編みを揺らした。

そこには……。

そこには、焼き払われた後の、灰色の荒野だけが広がっていた。

「見せたかったんだ、この光景……。すっごくきれいなお花畑を、みてほしかった」

「……それは、なんでだ？」

「アタシは、初めてここに来た時、何となく、凄く幸せな気分になったんだ。なんでかわからないけど心が暖かくなって、おちついて……。ああいうのを、救われたっていうんじゃないかって……」

「……」

「蒼一郎はどうだ？」

音彩は、母親が子供にするような優しい声だった。

「蒼一郎。ずっと苦しそうな顔してたからさ……」

「それで。俺をここに？」

こくり……。と、小さくうなずくだけだった。音彩の小柄な体を抱きしめて、蒼一郎は前に進む。

「……」

灰色の、花畑だったものを踏みつぶしながらその中央に向かって歩いていく。

「……蒼一郎……。ごめんな」

なぜ謝るのか、とは聞けなかった。  
音彩の細腕に力がこもる。

「アタシ……。まだ、死にたくない」

「ね、ねいろ……」

「嫌だ……。嫌だッ！　まだ、行きたいところも、したいことも……。いっぱい、いっぱいあるのに……。なんで、何で……。ッ！」

少女は自分の内側にわだかまったものを吐き出していくように続ける。

「アタシは……。この世界が憎い……」

「……」

ズズ……と、決定的に、少年の心の中で何かが動く音がした。

「……………」

それが。最後の言葉だった。

ゆっくりと、少女の体を花園だった場所に卸していく。

悪魔は自分の手のひらを見つめてからゆっくりと息を吐きだした。

ゴツン！　という衝撃が後頭部に突き刺さった。肉食動物が獲物を確かめるような動きで振り向けば、そこにはただの人間が立っていた。

手に大きな石を持った人間はそれを悪魔に向けて投げつける。

「こんな場所まで何しに来た化物がア！」

「おねがいでから出て行って！　私たちの平和を踏みにじらないで！」

「化物ッ！　失せろッ！」

「……」

人間たちは悪魔に罵声を浴びせていく。

悪魔はゆっくりと翼を持ち上げていくとそのまま、空に舞い上がった。

枯れた花畑も、音彩のことも振り切って。少年だった悪魔は飛んでいく。

灰色の空も、大地も、その果ても、すべてが醜くくておぞましい。

世界は。

この世界は。

きれいなんかじゃなかった。

「……ッ！」

もはや叫ぶことすらできなかった。

悪魔は、緩やかな線を描きながらエタニティの基地がある場所に落ちていくように降り

ていく。

時間も時間だ。ほとんど誰もいない拠点はいつその事寒々しくすら感じた。そこへ。

「やあやあ。ようやく帰ってきてくれたようだなによりだよ奏風くん」

まるで親友でも出迎えるような声があった。

蒼一郎を出迎えたのは白衣の青年だった。大学生、或いは高校と言われても信用してしまいかもしれないほどの若々しさを保った白衣の男。

明るく染めた髪の毛に人懐っこそうな表情の研究者。

「……ツクツハア」

「そうイライラしないでくれたまえよ。君たちの冒険ごっこを見逃してあげていただろう？」

そこに来て、蒼一郎はようやく悟った。全部、この研究者の手のひらの上だった。この研究者は全てを掌握していた。

そうすれば。

「音彩のことは」

「ああ、アレは本当にかわいそうだ、僕としても心が痛むよ、いやー、申し訳ない」

まるで軽い遅刻を詫びるようなテンションだった。

それでも……。いいや、そんな軽い言葉だからこそわかってしまう。心が痛む、申し訳ない。そのどちらも紛れもない本心だ。

その事実が、薄気味悪くて仕方がなかった。

「織り込み済みだったてか？」

「ヒュドラーは素晴らしい発明だと思わないかい？」

「死ね」

そんな場所まで？ とはあえて言わなかった。ツクルハの横を通り抜けて歩いて行く。

暖かい風が通り抜けた気がした。いつの間にか灰色の雲の隙間から青い空がのぞいていた。

だけど、それを一緒に見たかった少女はもういない。

「くだらねエ。どいつもこいつも……」

蒼一郎は、俯きながら決意する。

「ブッ壊してやる。この世界もそこに無意味に生きてるお前らも」

誰に向けるでもなく宣言する。

虚ろな瞳の死神は、地獄の底に向かって突き進んでいく……。

^  
丁  
v